

論文

ヴィクトリア時代の臨海リゾート開発

荒 井 政 治

序

I 臨海リゾートの成長

- (1) 海辺の魅力
- (2) 上流階級のリゾート
- (3) 中流階級のリゾート
- (4) 労働者階級のリゾート進出

II 大衆リゾートと高級リゾート

- (1) 大衆リゾートーブラックプール
- (2) 高級リゾートーブライトン

III 臨海リゾートの開発

- (1) 貴族主導型開発
- (2) 土地会社主導型開発
- (3) 地方自治体主導型開発

IV ビア（レジャー棧橋）とパヴィリオン

V リゾート関連産業

- (1) 宿泊産業
- (2) 娯楽産業
- (3) ゴルフ・ブーム

序

イギリスでは鉄道時代以降、夏になると海岸に押し寄せ、一家揃って海辺の休日を楽しむことを重要な年中行事とする家庭がふえていく。イギリス社会に定着したこのようなライフスタイルは、モータリゼーションが進み、レクリエ

1) 1962年、イギリス国内で休暇をおくった者の中72%は海辺へ行った — Edmond W. Gilbert, 'Holiday Industry and Seaside Towns in England & Wales', *Festschrift Leopold G. Scheidl 60 Geburtstag*, Vienna, 1965, I, p. 235.

ーションが高度化し、多様化した現代も依然として続いている¹⁾。1977年のレクリエーション統計によれば、日帰りの行楽では「ドライブ」がトップで、「シーサイド・リゾート」は2位であるが、4泊以上の休暇になると「シーサイド・リゾート」がトップ、「海岸」が2位、「ドライブ」は3位になる²⁾。潤いがなく、味気ない大都市・工業都市における日常生活の渇き、騒音、公害、ストレスが人びとをして自ずと海辺に向かわせるのであろうか。

馬車交通の時代には、リゾートといえば内陸の温泉（スパ）であり、リゾートライフを楽しんだのは、もっぱら富裕な上流階級であった。ところがヴィクトリア時代（1837—1901年）には経済発展を反映して、中流階級も、ずっと後れて労働者階級の間にも、臨海リゾートに対する需要が急速に高まった。他方では、それを満たす条件——アクセスを容易にする交通機関の発達、リゾート都市におけるアメニティの充実、宿泊施設、娯楽施設の増大等——も着実に整備され、ヒンターランド（需要）の性格に対応した、さまざまなリゾートが海岸線に沿って形成されていった。巨大地主でありデベロッパーである公爵家が企画・育成した高級リゾートもあれば、地元資本と自治体を中心になって形成した大衆リゾートもあった。こうしたリゾート大衆化の過程は、またある意味ではレクリエーション民主化の一面とみることでもできるであろう。

ヴィクトリア時代は工業化とともに都市化が進行した時代であった。都市はもともと反自然的であり、人工的存在であって、潤いを欠く。ヴィクトリア時代の大都市は住居の過密、不衛生な生活環境、大気や水の汚染、コレラの大流

表1 ロンドンの霧の増加（年間の霧の日数）1871—90年

1871—5	1876—80	1881—5	1886—90
51±15	58±15	62±7	74±11

（出所） Peter Brimblecombe, *The Big Smoke, A History of Air Pollution in London since Medieval Times*, 1987, p. 111.

2) J. Allan Patmore, *Recreation and Resources*, 1983, p. 130.

行等，山積する都市問題に悩まされた時代であった。霧の都ロンドン〔表1〕は巨大な噴煙 ‘the big smoke’（または単に ‘the smoke’）と呼ばれ，‘day darkness’ とか ‘high fog’ の新語を生み，煙と霧のミックスした状態は，後年（1905年）‘smog’ と呼ばれるようになった。1853年に煙害自力排除法（Smoke Nuisance Abatement (Metropolis) が工場の煤煙を規制し始めたが，家庭の排煙を含むロンドン全体が大気汚染の元凶であるという認識は未だほとんどなかった。「コーク・タウン」³⁾ が集まる工業地帯も事情は同じで，1848年の公衆衛生法以前には，空を覆う黒煙を繁栄のシンボルと考え，煤煙の臭いに利潤の臭いをかぎとる人びとが大多数を占めていた。汚染は水質にも及んだ。汚水の流入によってテムズ河が汚染されると，そこを取水源とする水道水が汚染され，コレラの大流行を招いた〔表2〕。「世界の工場」になったイギリスは繁栄とともにさまざまな公害を抱え込んだのだ。週末に，シーズンに市民が海辺に健康と快楽を求めたのは自然の行動であったかもしれない。したがって大都市・工業都市の自治体が公害対策に頭を悩ませているとき，リゾート都市でも，急増するリゾート人口，観光・レクリエーション需要に応じて，多額の公共資金を投じてインフラストラクチャーの建設とアメニティの充実を急がねばならなかった

表2 水質とコレラ 1832—66年

年	水 質	コレラによる死者数 (ロンドン市民1万人当り)
1832	汚 染	31.4
1849	重度の汚染	61.8
1854	軽度の汚染	42.9
1866	軽微の汚染	18.4

（出所） Bill Luckin, *Pollution and Control, A Social History of the Thames in the Nineteenth Century*, 1986, p. 77. 原資料 *Rivers Pollution Commissioners Sixth Report, BPP, 1874, xxxiii.*

3) 「コーク・タウン」プレストンの例——米田清治「地方都市の生活環境」（角山・川北編『路地裏の大英帝国』）1982.

たのである。

臨海リゾートの開発は、19世紀末四半世紀にその最盛期を迎えたが、当時の成熟したリゾートの景観と施設は、今も内外の観光客に親しまれ喜ばれている。ヴィクトリア時代の海水浴場のモラルとマナーを象徴した「ベISING・マシン」はすでに1920年頃までに姿を消した。しかし「世界の工場」の形成に貢献したランカシャーの労働者に報いた3基(ブラックプール)をはじめ、約50余の「ピア」が、今も臨海リゾート最大のシンボルとして健在である。日本では1987年に「リゾート法」(総合保養地域整備法)が制定され、イギリスに後れること約100年、ようやくリゾートライフに対する国民の関心が高まってきた。地理的变化に富んだ日本には、はたしてどんなリゾートが形成され、憩いの場が提供されるのであろうか。

I 臨海リゾートの成長

(1) 海辺の魅力

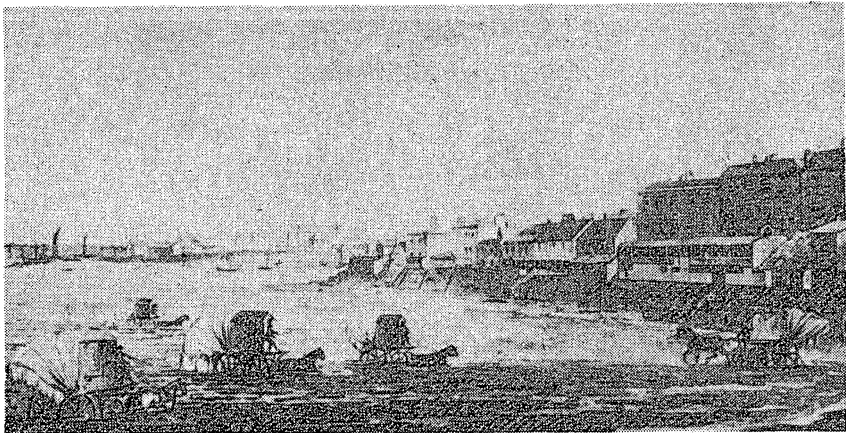
海辺で夏を楽しむイギリス人の習慣は、18世紀の庶民の間では末だほとんど知られていなかった。ところが19世紀半ば以降、それはイギリス人の生活様式の不可欠の要素となった。『イギリス—くにとひと』(1982年)の著者ピーター・ミルワード(1925年生まれ)は次のようにいう。

「イギリスのどの家庭でも、8月には少なくとも2週間は海辺で休暇を過ごすのを当然のことに考えていた。それは、ロースト・ビーフやヨークシャー・プディングと同じほどイギリス的な、私たちの生活に深く根ざした慣例となっていた。…こうした住い(バンガロー)で過ごす2週間は、私たちをして詩人ワーズワースとともに「生きていることは、この上もない幸福だ」と感じさせるのだった。(中略)歴史的に見ると、夏の間のイギリス国民の海辺への殺到ぶりは実に驚くべきものである。1800年以前では聞いたこともなかったことである。しかし、その後間もなく増大しつつあった中産階級の人びと—私の家族もこの階級に入る—の間でことに大流行となった。これは、イギリス人の性格の大変化を意味する奇妙な現象であると私は思う⁴⁾。」

4) ピーター・ミルワード、中山理訳『イギリス—くにとひと』1982, pp. 83-86.

また『イギリス日常生活史(4)1851—1914年』（1934年）によれば、「ヴィクトリア朝の各家庭の生活で、心が弾む年中行事の一つは海辺を訪ねることであった。資力のある家庭なら大てい1カ月または2週間を海辺で過ごしたし、それほど長く留まれない人びとは2、3日滞在した。しかしこのような習慣は、本書が対象とする時代の始期〔1851年〕においてはまだ比較的新しいことであった」⁵⁾という。とすれば、イギリス人が夏季に大挙して海に押し寄せる風潮は、遠い昔に始まったことではなく、意外に新らしい現象であったことが分かる。

もっぱら内陸部の温泉（スパー）をリゾートとしていた上流社会に、初めて海辺の魅力を教え、ニュートレンドの発端をつくったのは、海水療法（water-cure）を奨めた医者であった。海水が万病に効くことを説いた *A Dissertation on the Use of sea-water in the Diseases of the Grands*（英語版1752）の著者リチャード・ラッセルはとりわけ有名である。ブライトン、ブラックプール、ウェイマス、スカーバラ、マーゲイトその他が相次いで海水浴場となり、保養地となったのは、その効果の現われであろう。初めは海水とオゾンときれい



18世紀末期のマーゲイトの光景

5) Marjorie & C. H. B. Quennell, *A History of Everyday Things in England IV 1851—1914*, rev. ed. 1958, p. 207.

な砂浜にひたすら健康を願って集った人びとも、やがてそこに新しい快樂の場を見出すようになる。最初に登場したのがベISING・マシン (bathing machine) である。それは図にみられるように、海水浴客を浜から水際まで運ぶ幌馬車のようにみえるが、それはまた客（とくに女性）が着替えをする更衣室でもあった。ロンドンに近いマーゲイトの浜辺には、1780年にそんなマシンが20台おかれたが、1800年には40台にふえていた。人が集まってくると企業心に富んだ地元の人達が次々に新商売を考え出し、コーヒーハウスを建てたり、海が荒れた日も商売ができるように屋内浴場を設けたりした⁶⁾。

（2）上流階級のリゾート

海辺が注目されるようになる18世紀半ばまで、上流階級に人気のあったリゾートは内陸の温泉（スパ）であった。16世紀末期には鉱泉の医療効果が高く評価され、富裕な湯治客がそこを訪れた。17世紀にはハロギット、バクストン、ロンドン商人が訪れたエプソム、チャールズ一世の後ヘンリエッタ・マリアが有名にしたタンブリッジウェルズ、日記作家のサミュエル・ピープス（1633—1703年）が逗留したバース、それにスカーバラが最も重要であったが、華麗な社交生活の演出家リチャード・ナッシュ（1674—1761年）によって管理運営されていたバースがそれらのモデルになっていた。

健康と快樂を求めて温泉を訪れ、優雅なリゾートライフを楽しんだのは貴族やジェントリーの家族だけではなかった。高い馬車代と滞在費を負担しうるマーチャント、退役した軍人、退官した官僚、その他さまざまなプロフェッショナルな職業人が含まれていた。温泉にはポンプルーム、アセンブリールーム、コーヒーハウス、貸本屋などのレジャー施設があり、湯治客たちは一定のルールに従って飲食、演劇、ギャンブル、ダンスを楽しめるようになっていた。そこはまた名門の御曹子と富豪の令嬢が接近し易い社交の場であり、家柄と富を結びつける結婚市場でもあった。湯治場であり、社交場であるというスパの

6) C. M. Yonge, 'Victorians by the Sea', *History Today*, Sept. 1975; Martin Stanton, 'Sea Bathing at Margate', *History Today*, July 1983.

特徴は、海辺のリゾートへも持ち込まれた。18世紀末から19世紀初頭にかけて、ジョージ三世（1738—1820年）やその皇太子、宮廷貴族らが年々海水浴場を訪れ、華やかなリゾート生活をくりひろげた結果、そこはハイクラスのリゾートとして有名になった。たとえば南部のウェイマス、ブライトン、ワーシング、テムズ河口のサウスエンドなどがそれである⁷⁾。

（3）中流階級のリゾート

産業革命の時代には、一方で豊かな新興中産階級が成長し、他方ではターンパイク道路、駅馬車、運河網そして鉄道がリゾートへのアクセスを容易にした。勤勉で事業に熱心なロンドンの働き蜂も、地方都市の商工業者も、都会の煤煙と喧騒を逃れて、新鮮な大気と、健全で多様な快楽を求めて海辺のリゾートを訪ねるようになる。彼らが上流階級の優雅なライフスタイルを模倣するようになると、2～3週間の海辺の休日（seaside holidays）が中流階級のステータスを象徴する夏の行事として、しだいに定着していった。働き者の中流階級はリゾートライフも堅実で、海水浴、散策、乗馬、植物採集、小石や貝の採集、古代遺跡の訪問、ダンス、カード遊びなどが主たる楽しみであったという。貴族やジェントリーたちのリゾートにおける行動が自由闊達であったのに対して、彼らのそれは福音主義的な道徳に反しない、抑制のきいた、やや堅苦しいものであったように思われる。

イギリス海峡に面したイングランド南部は気候がマイルドで避寒に適したリゾートが多い。恵まれた中流階級の人びとは、海水浴のためというよりは、むしろ避寒のため、ドーバー、ワイト島のヴェントナー、ボーンマス、トーキーを訪れた。ことにトーキーは早くから病弱者の冬の保養地、定住地として有名になっていた。風光明眉の湖水地方やウェールズ北部もまたランカシャーの綿業家や綿成金の別荘が建ち並ぶリゾートとして開発され始めた。鉄道より一足早く、蒸気船の就航によってロンドン、ブリストル、リヴァプールの中流階級

7) J. A. R. Pimlott, *The Englishman's Holiday*, 1976, Ch. 3; 川島昭夫「リゾート都市とレジャー」角山・川北編, 前掲書, 1982.

は新しいリゾートを求めたし、それに続いた鉄道時代が自営業者やホワイトカラーをリゾートに誘い込んだ。1830—1870年の間の鉄道網の普及と中流階級の支出能力の増大が、リゾートの発達を刺激した事情については、既に述べたのでここでは繰り返さない⁸⁾。

（４）労働者階級のリゾート進出

ごく大ざっぱに言って、1870年代までリゾート客の主流はロンドンと地方の中流階級であって、労働者階級が海辺に休日の楽しみを求めるようになるのは19世紀末四半世紀の現象であった。イギリス各地のリゾートが急速に大衆化し、俗化し、歓楽地化したのはこの時代である。リゾートの大衆化、レジャーの民主化が進み、レジャー産業が発展したことは、リゾート人口の増加に反映している。1851年には人口1万以上の臨海リゾート都市は9都市にすぎなかったが、1881年には23、1911年には39に増加している。さらに5万以上になると、1851年、81年にはブライトンただ一つであったが、1911年には8都市（多い順にブライトン、ボーンマス、サウスエンド、ヘイスティングズ、ブラックプール、グレイトヤーマス、ゴールストン、イーストボーンおよびサウスポート）をかぞえた⁹⁾。それらの場所からいってブラックプールの大膨張はランカシャー工業都市が、その他は主としてロンドンが背域になっていたことは明らかである。

労働者階級のリゾート進出が最も早かったのはランカシャー地方で、ヨークシャーの毛織物工業地帯より約10年は早かったという。というのも雇用が安定しており、夏季には（無給ではあるが）お祭りの1週間を一斉休業する習慣があり、近くにブラックプールという恰好のリゾートに恵まれていたからであろう。したがって1890年代には、夏の連休にはランカシャーではどの町も、ガラ空きになり、店は閉まり、芸人たちは海辺へ移動し、教会やチャペルでは貧しい会員の礼拝式のために資金をプールしておかねばならなかったという。反対

8) 荒井政治「ビクトリア時代の「レジャー革命」と交通革命」関西大学『経済論集』34巻6号、1985。

9) J. K. Walton, *The English Seaside, A Social History 1750—1914*, 1983, pp. 53-65.

に、近代的大工場の少ない地方、たとえば手作業を主とする中小企業が多いスタフォードシャー北部の陶業地帯とか、作業規律がゆるやかな「ブラックカントリー地方」では労働者階級がリゾートに繰り出すのは、世紀交替期または第1次大戦前夜であった。さらに妻子に収入の道がなく、なお聖月旺日の習慣が残っていた炭鉱地帯や重工業地帯ではもっと遅く、第1次大戦前夜になっても、せいぜい日帰りの行楽であった¹⁰⁾。

II 大衆リゾートと高級リゾート

リゾート客の主流が上流・中流階級であったところへ、労働者階級が押し寄せてくるようになると、それへの対応をめぐるイギリス各地のリゾートは新たな課題を抱え込むことになる。というのも上・中流階級の保養地、高級住宅地としてのリゾートのステイタスを維持していくことと、大衆の潜在的需要の高まりというビジネス・チャンスを捉えて観光収入を伸ばしていくこととは、互いに矛盾するからである。事実、すでに1880年代には、上品好みの富裕層の間には低俗な商業的大衆娯楽による騒々しさを嫌い、より静かなリゾートを求めて、新しい小さなリゾートや大陸のリゾートへ逃避する傾向が現われていた¹¹⁾。リゾートの格調を落さず、富裕な人びとのニーズに応えていくか、それとも少々の騒々しさや下品さには目を瞑って、大衆のニーズに応え、観光収入の増大をはかるかは、高度の判断を要する問題であった。1880年代以降、リゾート産業に利害をもつ地主、建築業者、地方自治体、指導的な市民、企業家は、豊かな上・中流階級と労働者階級の、価値観を異にする二つの社会層が求める異質のニーズに対して、現実にはどのように対応したのであろうか。ここには代表的な大衆リゾート、ブラックプール（ランカシャー）と、ロンドンの富裕層に支持

10) Walton, *Seaside Resort*, pp. 34-35.

11) Sue Farrant, 'London by the Sea: Resort Development on the South Coast of England, 1880-1939', *Journal of Contemporary History*, Vol 22, No. 1, 1987.

されたイングランド南部の高級リゾート、ブライトンの例を紹介してみよう。

(1) 大衆リゾート—ブラックプール

ランカシャー北部のアイリッシュ海に臨むブラックプールは、現在、長い遊歩道、さまざまなスポーツ・娯楽施設、エッフェル塔を模した高い鉄塔、会議場をもつ北西イングランド最大のリゾート(現在人口約15万)である。ランカシャーには、ほかにサウスポートという主として中流階級向きの静かな高級リゾートもある。1846年に鉄道が開通して以来、日曜日のブラックプールには労働者の団体客が押し寄せるようになり、1870年代にはすでに宿泊客がふえ始めていた。貴族やジェントリーのような大地主がいなかったブラックプールでは、開発のマスタープランはなかった。町の中央部とその浜辺に歓楽街が発展し、両端が高級住宅地と中流階級の宿泊地となった。

鉄道が開通する以前、夏のブラックプールには、ゆとりのある人びとが馬車で海水浴に来ていた。浜辺には未だ何の設備もなかった。海水浴には男も女も裸で、男女の区切りもない。海水をガブ飲みする前に大量の酒を飲む習慣があったらしい。そんな地方だから綿工業都市プレストンやマンチェスターの工場労働者のリゾートとなった後も、ここではサウスポートとは対照的に、騒々しく、すべてが庶民的で見栄や気取りがない。娯楽に対する当局の取締りも至って寛大で、宗教的な締めつけも無かったので、野外の演芸も盛り上がり、パブの数も多かった。したがって観光産業、娯楽産業が最も高度に発達したことが、ブラックプールの特徴である¹²⁾。たとえば1871年、ブラックプールのあるシンジケートはハリファックスの事業家と組んで遊園地会社 Raikes Hall Park, Gardens and Aquarium Company を設立し、51エーカー(6万2,000坪)の敷地に温室、音楽会場、舞踊会場、演芸場その他の娯楽施設をもつ大遊園地をつくり、ダンス、ショー、アクロバット、綱渡り、花火ページントを

12) J. K. Walton, 'The Demand for Working-Class Seaside Holidays in Victorian England', *Economic History Review*, 2nd Ser. Vol. 34, No. 2, 1981; Walton, *Seaside Resort*, Ch. 7.

見せている。さらにその数年後には、機械仕掛の競馬、ローラースケートリンク、自転車競技場、ミニ列車といった新しい娯楽施設も加わり、園内各所でアルコール飲料が売られるようになっていたが、スリや売春の方もなかなかのものであったらしい。

世紀末期のイギリスでは、ドイツ製品の氾濫を憂慮したアーネスト・ウィリアムズの警世の書『ドイツ製品』*Made in Germany* (1896) が多大の反響を呼び、保護貿易論が復活して、自由貿易主義の伝統にもようやく翳りがみえ始めていた¹³⁾。だが90年代のランカシャーの労働者階級の間では、不況をよそに行楽ブームが続いており、ブラックプールでは年間 300 万人以上の観光客が豪華な遊びのメニューを楽しんでいた。1893年にはブラックプールでは3番目のレジャー桟橋「ヴィクトリア・ピア」(後に「サウス・ピア」と呼ばれた)が竣工し、つづいて既存の2つのレジャー桟橋も大拡張がおこなわれた。ヴィクトリア・ピアには、開業した聖金曜日に1万2,000人、土曜日1万1,000人、復活祭の日曜日5,000人、そして月曜日には1万3,000人が入場したという¹⁴⁾。観光客が殺到すれば宿泊産業その他のサービス業の膨張は必至である。ブラックプールの急激な人口増加(1881年、1万2,989人が1911年には5万8,371人)にその一面がうかがわれる。ブラックプールを訪れる労働者のポケットからすればホテルの料金は高すぎる。彼らにとっては世話好きの女主人が一切の面倒をみってくれる賄付きの下宿屋や民宿が最もふさわしく、そんな宿がこの町の到る処にみられた。というのも大衆リゾート都市 ブラックプールでは、全戸数の1/3以上(1891年—34.6%)が賄付きで人を泊めていたからである¹⁵⁾。

リゾート産業はブラックプールに巨大な観光収入をもたらした。しかし、この成功の陰には市当局の強力な後援があったことを見逃してはならない。観光客に対する市当局の寛大な規制は別にしても、市は公園、図書館、美術館、博

13) 荒井政治『近代イギリス社会経済史』1968, 11章参照。

14) Simon H. Adamson, *Seaside Piers*, 1977, p. 36.

15) Walton, *Seaside Resort*, p. 86.

表3 ブラックプール市会議員の職業別人員と％ 1877—1913年

	1877—96年	1899—1913年
ジェントルマン	0	0
有業者（不詳）	4(6.9)	1(2.2)
退職者	4(6.9)	4(8.7)
専門職	3(5.2)	5(10.9)
観光産業	15(25.9)	7(15.2)
建築業者	12(20.7)	8(17.4)
小売業その他の商人	17(29.3)	21(45.6)
農業	3(5.2)	0

（出所） Walton, 'Municipal Government and the Holiday Industry in Blackpool 1876—1914', in Walton and Walvin (eds), *Leisure in Britain 1780—1939* (1983) p. 167.

物館、運動場、水泳場のほかプロムナードの拡張にも大規模に投資したし、秋冬にも観光客を誘致するためにポスターや新聞広告によって大々的な宣伝をおこなった。こうした市当局の業界寄りの姿勢には非国教徒的な生真面目な一部の市民は批判的であった。しかし、市当局はそれを無視し、業界と一体となってリゾート産業の発展に取組んだ。市当局のこの熱の入れようは、まるで「株式会社ブラックプール」の観があった。市はなぜそれほど積極的であったのか。それには観光収入が市の財政を潤すという理由もあげられよう。だがもっと明快な説明は、リゾート産業関係者が市会で多数派を占めていた事実である。表3にみられるように、リゾート産業に利害関係をもつ観光産業経営者、建築業者および商店主が市会議員の¾を占めていたのである。

（2）高級リゾート—ブライトン

温暖な気候に恵まれたイングランド南部の数多いリゾートの中でも、ロンドンの南方85キロのブライトンは、古くから高級リゾートとして知られており、今日でも美しい街並みに堂々たるホテルが立ち並ぶイングランド有数のリゾート（人口約15万）である。18世紀半ば、まだ小さな漁港であった頃、医師ラッセルによって健康保養地として注目され、1784年以降、そこに多額の費用をかけ

たオリエント風のロイヤル・パヴィリオンが建てられ、王室の愛顧をうけることになる。1830年代半ばにそこを訪れたあるアメリカ人は、当時の上流社会人の優雅なリゾートライフの一面を次のように描写している。

「ある者は図書館でぶらぶら時をすごす。ある者は店に腰を下ろしてゆっくり品定めするのが彼らに恵まれた小さな仕事の殆んど総べてである。ある者は体重を測って自分の健康状態を判断していた。こんな事が暇つぶしにする1日の務めである。午後になると申し合わせたように、海辺を岸壁に沿って散策したり、乗馬を楽しんだり、馬車を走らせたりした。馬に跨った大勢の若い女性を見かけたが、とても美事で、手綱さばきも自信にみちていた。ある女性たちはジェントルマンを伴わず、召使を連れていた。2頭立ての馬車に乗った2人連れを見かけたが、いずれも単独で、大そう気の荒そうな2頭の馬をひいていたが、馬を御するさまは実に手なれたものであった。正装した2人の宮内官が間をおいて従っており、通行人に妨げられたり、会話を立ち聞きされないように気を配っていた。ここでは代表的な馬車は、供回りのついた立派な馬車であって、ふだん坂道で見かけるようなポニーのひく馬車やがらくたのような貸馬車の類ではない。こんな素晴らしい光景は他ではちょっと見られないであろう¹⁶⁾。」

やがてロンドン・ブライトン間にはずば抜けて立派な道路がつき、駅馬車が迅速、低廉にしかも頻繁に走るようになると、それまで宮廷人、貴族、ジェントリーの世界であったリゾート都市に、戦争ぶとりした中流階級の進出が目立つようになる。上流階級を真似た、彼らの服装、アクセント、態度、遊び方は当時の文人から嘲笑され、風刺画の恰好の題材にされた。さらにロンドン・ブライトン鉄道が開通（1841年9月）すると、この傾向に一段と拍車がかかり、夏のブライтонはロンドンから押し寄せる日帰りの海水浴客で溢れる時代がやってきた。このようなリゾート社会の民主化は避けがたい現象であったが、上流階級にとっては好ましい傾向ではない。離宮のエキゾチックな雰囲気を受されたヴィクトリア女王は、1837年4月以来、何度かそこに滞在されたが、1845年2月が最後のご訪問となった。王室は1850年、パヴィリオンを5万3,000ポンド

16) A. S. Mackenzie, *The American in England*, 1836, cited in John Lowerson and John Myerscough, *Time to Spare in Victorian England*, 1977, p. 26.

で市に売却して撤退し、新しいリゾートをワイト島に求めている¹⁷⁾。鉄道時代のブライトンは、ロンドン市民の手近かな「郊外の手海」（マリナー・サバブ）になり、長年にわたる王室の愛顧を失ったとはいえ、「海岸都市の女王」としての品位を備えており、ケント州のラムスゲイトとは勿論、マーゲイトともトーンを異にする高級リゾートであり、高級住宅都市であった。

リゾート都市ブライトンの特色は秋と冬にみられた。ごく初期のブライトンのシーズンは6月に始まり11月の初めに終わっていたが、1840年頃には「夏の数カ月はロンドンの商人たちに明け渡され、秋の初めは法律家たちに引き渡される。そして11月になって彼らがウェストミンスターへ召喚されると、上流社会の者がブライトンへ移り始める」¹⁸⁾ようになっていた。つまり夏の間は中流階級が、冬には上流階級が避寒に訪れていたのである。鉄道時代になると、夏のシーズンにはロンドンの中流階級の滞在、日帰りの労働者たちで賑い、秋に入ると年収100ポンドクラスの堅実なホワイトカラー一家の滞在が多かったという。彼らのリゾートライフは歓楽型というよりは自然探訪型であった。彼らの楽しみは、キングスロード（海辺のプロムナード）でファッションを競うことでも、遊び場で騒ぐことでもなく、自然そのものにあった。そこは「家族の結束をいっそう強固にする処であり、職場を離れて休息し、アマチュアの植物学者、考古学者、地質学者になって、静かで経済的な楽しみをじっくり味わう場所であった」¹⁹⁾。そうした滞在者はその間、一軒の家を賃借することが多かったが、年輩の婦人しばしば未亡人一が経営する（賄付きの）下宿屋や民宿を利用することもできた。ただ下宿屋や民宿の数は、イングランド最大のリゾートにしては少なく、料金も高かったにちがいない。というのも、1891年の統計によると、下宿屋・民宿を営んでいたのは全戸数のわずか3.3%（ブラックプールでは

17) C. Gould, *The Coming of the Railway to Brighton 1841-1851* (Unpublished Univ. of Kent BA Dissertation) 1973, p. 31.

18) Walton, *Seaside Resort*, p. 18.

19) Lowerson and Myerscough, *op. cit.*, p. 35.

34.6%)にすぎなかったからである²⁰⁾。もっともブライトンの高級イメージも19世紀末には（近隣のイーストボーンの成長もあって）かなり低下していた。

Ⅲ 臨海リゾートの開発

イギリスにおける臨海リゾートの発展過程は上述のとおりであるが、「リゾート」が独自の範疇として、イギリスの人口調査報告書（センサス・リポート）に初めて登場するのは1851年であった。当時、人口1,000人以上のリゾートは（イングランドとウェールズに）61、その後急速に成長して1881年に102、そして最盛期の1911年には131を数えた。その中には富裕な人びとの保養地・住宅地として知られた高級リゾートもあれば、主として労働者階級の観光地、歓楽地として有名になった大衆リゾートもあった。また開発の時期も一部には鉄道時代以前に遡るものもあり、成長のペースもさまざまであった。たとえばイギリス海峡のプール湾に臨むボーンマスは、もと小さな漁村で、1851年の人口はわずか695人にすぎなかったが、鉄道開通（1870年）以後、急成長して1881年には16,859人、そして1911年には78,674人になり、人口規模ではブライトンに次ぐ第2位のリゾートになっていた。各リゾートのこうした相違は、さまざまな要因—たとえば地勢（美しい砂浜、ゆるやかな崖、急傾斜のないこと）と気候（とくに冬の気候）、潜在的な需要構造（ヒンターランドの性格）、開発主体（地主、デベロッパー）の開発方針、交通事情（鉄道開通によるアクセスの便利さ）、地方自治体の姿勢—に基因することが多い。

臨海リゾート開発が個別、散発的な時代をすぎて、全国的に活発になるのは1840年代からであったが、それから1870年代まで、リゾート成長段階（第1節参照）からいえば中流階級が主流の時代は、貴族・ジェントリー主導の計画的開発、つまり大地主主導型の開発であった。さらにこの時代を株式会社法の成立（1855—1862年）を挟んで2分すると、前半は（1）貴族主導型の開発が、後半は（2）土地会社主導型の開発が特徴的であったように思われる。そして世紀末期から

20) Walton, *Seaside Resort*, p. 86.

20世紀にかけて、労働者階級がリゾートに進出するリゾート大衆化時代になると、大地主の役割は後退し、代って地方自治体が主役を演じる、いわば(3)地方自治体主導型に移っていく。開発の複雑な現実を、それを推進したプロモーターを中心に、あえて類型化すれば以上になるだろうか。

(1) 貴族主導型開発

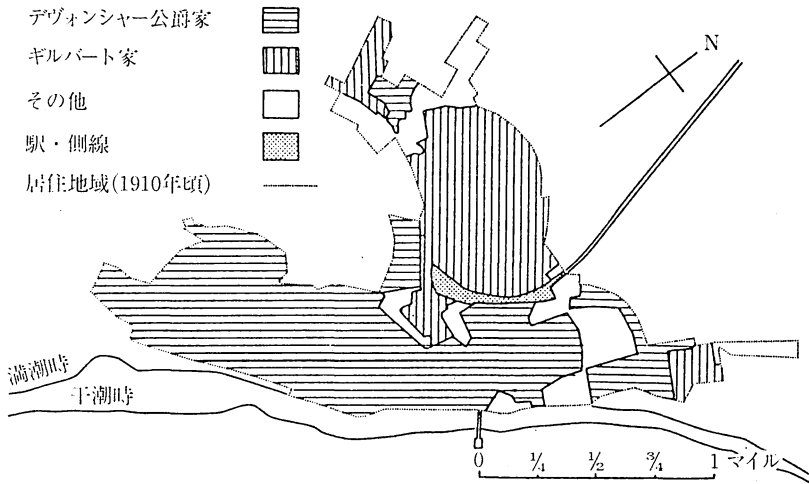
小さな漁村に新しいリゾート都市を形成することは、市場予測の困難さ、開発初期の先行投資の巨大さ、現実に入収をあげるまでの懐妊期間の長さを考えただけでも、いかにリスクの大きい大事業であったかが分かる。ヴィクトリア時代のイギリスで現実にこのような大事業を企画、推進できたのは、海辺に広大な土地をもっていた貴族やジェントリーであった。たとえばイーストボーン(the Devonshires), フォークストン(the Radnors), トーキー(the Palks), ボーンマス(the Tapps-Gervis-Meyricks), ベックスヒル(the Seventh Earl de la Warr), サウスポート, ランドドノー, スケグネス(the Scarbroughs), 等は彼らによって形成された代表的なリゾートとされている²¹⁾。こうした貴族開発型リゾートは、当初から地域区分、アメニティなど綿密に計画され、建築基準その他も厳しくコントロールされた高級リゾートが多く、裕福な観光客や定住者にアピールしたという。次にデヴォンシャー公爵によって開発された、イングランド南部のイーストボーンの例を紹介してみよう²²⁾。

イーストボーン—19世紀末期、ここは“Empress of Watering Places”として、イギリスの水辺のリゾートの中でも女王的存在を誇った高級リゾートであり、デヴォンシャー公爵によって開かれ育てられた「公爵の町」(the Duke's Town)であった。第7代デヴォンシャー公爵、ウィリアム・キャベンディッシュ(1808—1891年)は進歩的でリベラルな地主として、イーストボーン、温泉地バクストン(ダービーシャー)のリゾート開発のほか、アイルランドに鉄道

21) Walton, *Seaside Resort*, p. 104; David Cannadine, *Lords and Landlords, the Aristocracy and the Towns 1774—1967*, 1980, p. 288.

22) Cannadine, *op. cit.*, Part 3.

19世紀イーストボーンの土地所有者

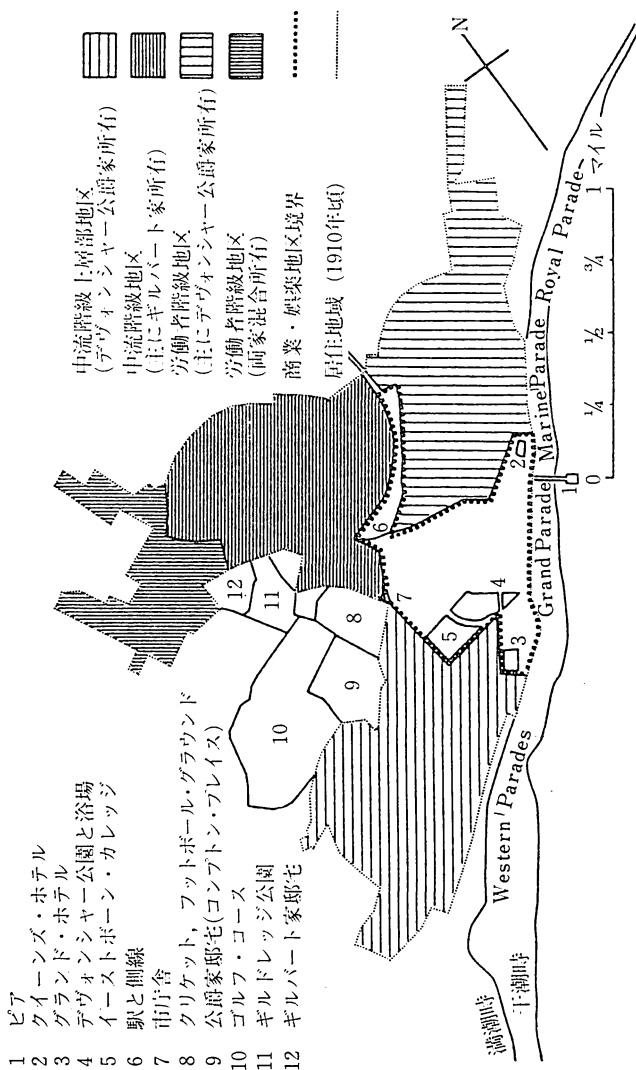


を敷き、鉄鋼都市バロー・イン・ファーニス(カンブリア州)を育てる一方、ロンドン大学総長(1836—1856年)、女王夫人のあとをうけてケンブリッジ大学総長(1861—1891年)の要職を歴任している²³⁾。

キャベンディッシュ家はイギリス屈指の大土地所有者(1883年、198,572エーカー)でイーストボーンでは3.2キロメートルの海岸に沿って2,625エーカー(321万坪)の土地一町全体の $\frac{2}{3}$ を所有していた。この景勝の地を開発して、ハイクラスのリゾート都市をつくる構想を立てた公は、まず足の便を確保するために鉄道会社、ロンドン・ブライトン南岸鉄道を説得して(隣のブライトンより8年おそく)1849年5月、ここに支線をひき入れることに成功した。1851年、町の人口は3,400人というから50年間に2倍にふえたにすぎない。公の構想に基づいてヘンリー・カー(公の顧問弁護士ベンジャミン・カーの親類)の開発のマスタープランが完成したのは1859年、それに基づいて最初の大工事である防潮壁ができ、台地に多くの家屋が建ち並んだのは1862年であった。しかし、その頃の

23) *Dictionary of National Biography* による。

1910年頃のイーストボーンのアメニティ



イーストボーンは防潮壁は短かく、給水・下水施設は貧弱で、レクリエーションもクリケット、クロッカー、アーチェリーができる程度の、ミゼラブルなりゾートであったという。

イーストボーンには公爵家のほかに、ギルバート家というもう一人の大地主（956エーカー、町全体の4/5）がいたが、町全体の開発をリードしたのは公爵家であった。防潮壁、道路、上下水道などのインフラストラクチャーを土台に、開発が最盛期を迎えるのは1870年代と80年代で、この20年間に住宅建築が進み、アメニティが整備され、住民の間にはゴルフ、テニス、サイクリングを楽しむ多くのクラブが生まれた。人口も1871年の約1万人が、公爵が亡くなる1891年には3万4,000人（約5,000戸）に増加していた。1883年、イーストボーンは自治都市になり、公爵の代理人ジョージ・ウォリスが初代市長に選ばれ、3年後には実に壮麗な市庁舎の竣工をみている。

高級リゾート都市という当初の計画にしたがって、町全体は高級住宅区、労働者住宅区、商業・歓楽区といった幾つかのゾーンに分けられ、各建設業者への建築認可にあたっては、公爵家は建物の等級と戸数（500—999ポンド〇戸、1,000—1,499ポンド〇戸、1,500ポンド以上〇戸のごとく）を指示するとともに、その実施を厳しく監視した。そのためブライトンを超える高級住宅が中心になり、300ポンド前後の低家賃の労働者・職人用住宅は常に不足がちであったという。

表4 イングランドにおけるリゾートの死亡率（1,000人当たり）

リ ゾ ー ト	1899年	1904年
イーストボーン	10.8	10.2
ヘイスティングス	14.5	13.2
サウスポート	16.1	14.7
バ　　　　ス	18.2	15.4
グレイトヤーマス	18.7	17.5
ブ　ラ　イ　ト　ン	19.0	16.6
ス　カ　ー　バ　ラ	19.3	14.8

（出所） Cannadine, *op. cit.*, p. 266.

また町の中に緑をふやし、農村的雰囲気を取り入れることには熱心であったが、工場は全面的に排除された。新鮮な空気、健康な環境は高級リゾートには不可欠の要素となるからである。リゾート都市の死亡率が大工業都市より低いのは驚くにあたらないが、イーストボーンは格別に低かった〔表4〕。

リゾート形成における一貫した計画性ととともに、注目したいのは町のアメニティの整備に対する公爵家の貢献度である。1855年、セントセイバー教会の建築にあたり、公爵家は用地と5,000ポンド（ちなみにギルバート家は100ポンド）を提供している。このように用地と資金を町に寄付した事例は、1859—1914年の間に教会9、教会学校4、技術学校1、図書館1を数える。しかしリゾートにとって最も重要なのは衛生状態である。1860年代における下水管敷設の大工事のさいには、合計4万4,000ポンド（ギルバート家は5,000ポンド）を寄付し、最高水準の下水施設を完成させている。他方、会社形態をとるその他の公共施設に対しては、表5のように主として大口出資者の形で貢献した。

最後に、公の没後1907年、第8代デヴォンシャー公爵が多額の支出を惜しまず「デヴォンシャー公爵イーストボーン・オーケストラ」を創設し、市内の公園のみならず、地方都市でも演奏会を開催して、高級リゾートの魅力を宣伝し、ハイクラスの人達の誘引につとめたことを付言しておきたい。

（2）土地会社主導型開発

株主有限責任制が確立された1855年と1862年の間に、イギリスでは近代株式

表5 デヴォンシャー公爵のイーストボーン各社への投資額 1893年

会 社 名	払込資本金（£）	公爵出資額（£）
水 道 会 社	202,580	117,390
ピ ア 会 社	37,500	6,250
私 立 学 校	7,000	5,580
公園・浴場会社	72,330	45,170

（出所） Cannadine, *op. cit.*, p. 283.

会社制度が整備された²⁴⁾。1862年の法律は株式会社設立の自由をめぐる論争に終止符を打ち、本格的な株式会社時代を開く画期的なものとされているが、同法はまたリゾート開発のパターンに大きな変化をもたらした。というのも、この法律は土地所有者と地方の有力実業家との結合と、大資本の形成を容易にし、土地会社(land companies)、不動産会社(estate companies)によるリゾート開発という新たな道を用意したからである。1863—65年の間に登記された株式会社のうち、「土地・建物」に関する会社が最も多数(103社)を占めているのも決して偶然ではない²⁵⁾。具体例としてコルウィンベイ(ウェールズ北部)、クラクトン(エセックス州)、セイントアンズ(ランカシャー)の3つのリゾートがあげられる。いずれもイーストボーンに比べると遙かに小規模で、住宅も2軒連結のセミ-detached・ハウスやテラス・ハウスが多く、格も低いが、それでも1911年には1万内外の人口をもっていた。これらのリゾートを開発した3つの土地会社の発起人の中には、中心となった有力地主のほかに、コルウィンベイではマンチェスターの実業家、クラクトンではロンドン蒸気船会社、セイントアンズではロッセンデルの工場経営者が含まれていた。

土地会社は貴族、ジェントリーにならって、防潮壁、街路、下水路の建設費を負担し、リゾートのステイタスを落とさないように、たとえば最低建築費の設定、住居区、商業区といったゾーンの設定、建築様式の指定、密度の規制をおこない、望ましくないユーザーには規約を遵守する旨の誓約を求めたという²⁶⁾。

以上の2つのタイプのほかにさまざまなものがあった。その一つは鉄道会社が開発にイニシアティブをとった場合であるが、これは意外に少なく、シロスとシースケイル(ともにカンブリア州)、ウィザーンシー(東海岸のハンバーサイド)

24) 荒井政治『イギリス近代企業成立史』1963、4章と5章。

25) B. C. Hunt, *The Development of the Business Corporation in England 1800—1867*, 1936, p. 149.

26) Walton, *Seaside Resort*, p. 122.

の3例が知られているにすぎない。他の一つは鉄道請負業者 (railway contractors) による開発の場合で、鉄道王ジョージ・ハドソン (1800—1871年) が1840年代に開いたウィットビー (ノースヨークシャー) と、国際的な請負業者サー・サミュエル・モートン・ピーター (1809—1889年) が1840年代～50年代に東海岸に開いたロウスタフト (サフォーク州) が知られている。1840年代、ピーターは従兄弟とともにグリッセル・ピーター商会 (Grissell & Peto Co.) を経営し、南東部鉄道その他の鉄道建設を手がけたが、1846年にそれを解散し、義兄弟のエドワード・ベッツと新たなパートナーシップ (Peto & Betts Co.) をつくった。1840年代半ばから1850年代末にかけて、彼はロウスタフト港を拡張するとともに、同港とノリッジ間を鉄道で連結し、港湾の南側に海岸遊歩場 (Marine Parade) とプロムナード、ホテルをもつ一大リゾートを開発した。さらに1850年代には、イースト・サフォーク鉄道 (1859年開通) を敷設して、グレートイースタン鉄道につなぎ、同リゾートをロンドンに直結させたのである。こうした大事業成功の背後には、彼とノリッジのガーニー銀行グループやロンバード・ストリート最大の金融業者オーヴァーランド・ガーニー商会との密接な金融関係があったことを指摘しておきたい²⁷⁾。

(3) 地方自治体主導型開発

イングランドの主要な臨海リゾートは、1870年代には既に顔をそろえており、続く80年代以降、それらのリゾートでは急速に大衆化が進行した。この時期には、かつてリゾート形成期に活躍した貴族やジェントリー、および土地会社の役割はしだいに後退し、代って地方自治体が前面に進出し、その後の拡張・整備をリードしていくことになる。リゾートにおける主役交替の主な理由の一つは、リゾートの大衆化にともなって公衆衛生の問題、レクリエーション施設の充実といったリゾート環境の改善の面で、自治体の責任範囲が著しく拡大

27) P. L. Cottrell, 'Sir Samuel Morton PETO'—*Dictionary of Business Biography*, pp. 644-53.

したことで、他方、（課税対象財産の増大によって）自治体財政が豊かになり、資金調達力（借入能力）が増大し、その達成がある程度可能になったためであろう。

世紀末四半世紀にはリゾート都市に限らず、自治体の福祉サービス、アメニティ整備に対する社会の期待は著しく拡大していた。たとえば1900年、王立統計協会の会長ヘンリー・フォウラー卿は「市の財政と市営事業」と題する講演の中で、次のように述べている。

「貧民の救済、警察による治安の維持、道路・街路の建設・管理とその照明、…公衆衛生施設—排水路・道路清掃・下水施設・精神病院・伝染病患者隔離病院、公衆浴場の設置、その他の伝染病予防対策、労働者住宅の改善」が市の主たる任務であったのが、今や一歩前進した。「教育や無料図書館を通じて、社会の知的欲求を充たすこと。次はレクリエーションのために美術館の開設、公園、公共広場の設置である。これらを支えているのは、健康で楽しい生活—かつてはその費用を自弁できる一部の住民にのみ許されていた—を多数の人びとの協力によって、総てに保障しようという原理である。」²⁸⁾

世紀末四半世紀はまた、フェビアン社会主義者の都市社会主義 (municipal socialism) の思想を背景に、公益事業部門で、私企業の地方自治体公有化や地方公営企業の創設が盛んな時代であったが、特にリゾート都市では議会の黙認の下に観光事業にまで手を広げる例が少くない。都市社会主義は「ガスと水道の社会主義」 (gas and water socialism) と皮肉られたが、その言葉はリゾート都市には妥当しない。というのも多くのリゾートではガス・水道の公営は平均を下回っていたからである。しかしその反面、大きなリゾート都市では観光産業、レジャー産業のような私企業と競合しがちな分野で自治体自身が「興業主」となっていた²⁹⁾。実際、19世紀末期のリゾート都市では、地元住民のレク

28) Sir Henry Hartley Fowler, 'Municipal Finance and Municipal Enterprise', *Royal Statistical Society Journal*, LXIII, 1900, p. 386.

29) Richard Roberts, 'The Corporation as Impresario; the Municipal Provision of Entertainment in Victorian and Edwardian Bournemouth', in Walton & Walvin, eds., *Leisure in Britain 1780—1939*, 1983, Ch. 8.

リエーション施設として公園、運動場、美術館ないし図書館をもつことは当然のこととなっていた。

エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845年）や、エドウィン・チャドウィックの『イギリスの労働人口の衛生状態に関する報告書』（1842年）から、われわれはその当時のイギリスの都市がいかに不衛生であったかを知ることができる。リゾートの場合も形成期を過ぎ、都市化が進むと同じような危険が待ちうけていることを知らされた。1849年のコレラの流行がそれで、マーゲイトその他のリゾート都市では多くの犠牲者を出した。このことが上水道や下水処理に対する人びとの関心を高めることになった。下水が海へ直行して海水浴場が糞便で汚れたり、地下水を汚染して飲み水に影響を与えている事実はよく知られていたが、下水処理事業はどこでも、道路の舗装や照明よりずっと遅れていた。いうまでもなく住民の税負担が重くなるからである。したがって公衆衛生法(Public Health Act)が1848年に制定され、58年に改正されても、事態の改善は遅々として進まなかった。自治体の下水事業に政府資金の融資が始まるのはやっと60年代のことである。このように19世紀末期になると、リゾート開発には防潮壁、プロムナード、上水道、下水道に莫大な資金を必要としたが、民間の投資はもはや期待できなくなっていたのである³⁰⁾。

世紀末期になると、大きなリゾート都市は文化的・レクリエーション的のアメニティを充実して、ステイタスの維持につとめるとともに、ポスターや新聞広告を通じて観光都市を宣伝した。観光客の誘致に熱心なことは、「株式会社ブラックプール」ほどではないにしても、大きなリゾートを持つどの自治体にも共通していた。ボーンマスでは2組のバンドをもって、7月—9月の間、日曜以外は毎晩、ピア(この町では市営)で、たそがれコンサートが開催されていた。浜辺の音楽はヴィクトリア時代の観光客には殊のほか喜ばれたからである。ピアの入場料の中にはバンドの演奏するセレナードも含まれていた。夏の

30) Walton, *Seaside Resort*, Ch. 6.

観光客がふえたお蔭で、ボーンマスでは1881年と1914年の間にピアの年収は2,000ポンドから10,000ポンドに、5倍の増収になったという。市電も電気もガスも、夏の増収で他のシーズンの赤字をカバーしていたのが実状であった。観光宣伝費に税金を使うことの是非をめぐる、どこのリゾート都市でも一時問題になったが、コンセンサスが得られたのは、さまざまな形で市民に恩恵をもたらすことが理解されたからであろう³¹⁾。

IV ピア（レジャー棧橋）とパヴィリオン

発達した臨海リゾートのシンボルともいえる特徴はピア (pier) である。ふつうピアといえば、それは船客や積荷をおろす棧橋のことであり、港湾施設の一つであるが、19世紀後期のリゾートにみられたそれは、船着き場というよりは、海上に突き出た小遊園地の観がある。鉄製の長い棧橋、そのベンチで日光浴をしながら行き交う人びとを観察したり、突端にあるパヴィリオンでバンド演奏や演芸、軽い食事を楽しむことが、一般の行楽客にとってはリゾートの最大の魅力になっていた。かつて船で訪れる観光客の上陸用棧橋であり、積荷をおろす荷揚げ場にすぎなかったピアは、後には人びとの会合の場、プロムナード、そして娯楽センターとなり、庶民が心身ともにリフレッシュする遊歩棧橋、レジャー棧橋 (pleasure pier) へと転化していったのである。

ごく初期の有名なピアはブライトンの名所「チェイン・ピア」(Chain Pier) で、サミュエル・ブラウン（ナポレオン戦争中は海軍大佐、退役後はエンジニアとして活躍）が設計者である。1822年、地元の大地主で下院議員、トマス・ケンプの発起で設立されたチェイン・ピア会社が、27,000ポンドの資本を集めてつくったもので、ウェリトン公爵(1769—1852年)も出資者の一人であった。1823年11月、全長1,134フィート(345メートル)のピアが完成した。ピアの本来の目的はフランスのディエップとの間の定期船の発着場であったが、会社はしだいに観

31) Robert, *op. cit.*, pp. 140-145.

ピアのある臨海リゾート 1813-1976

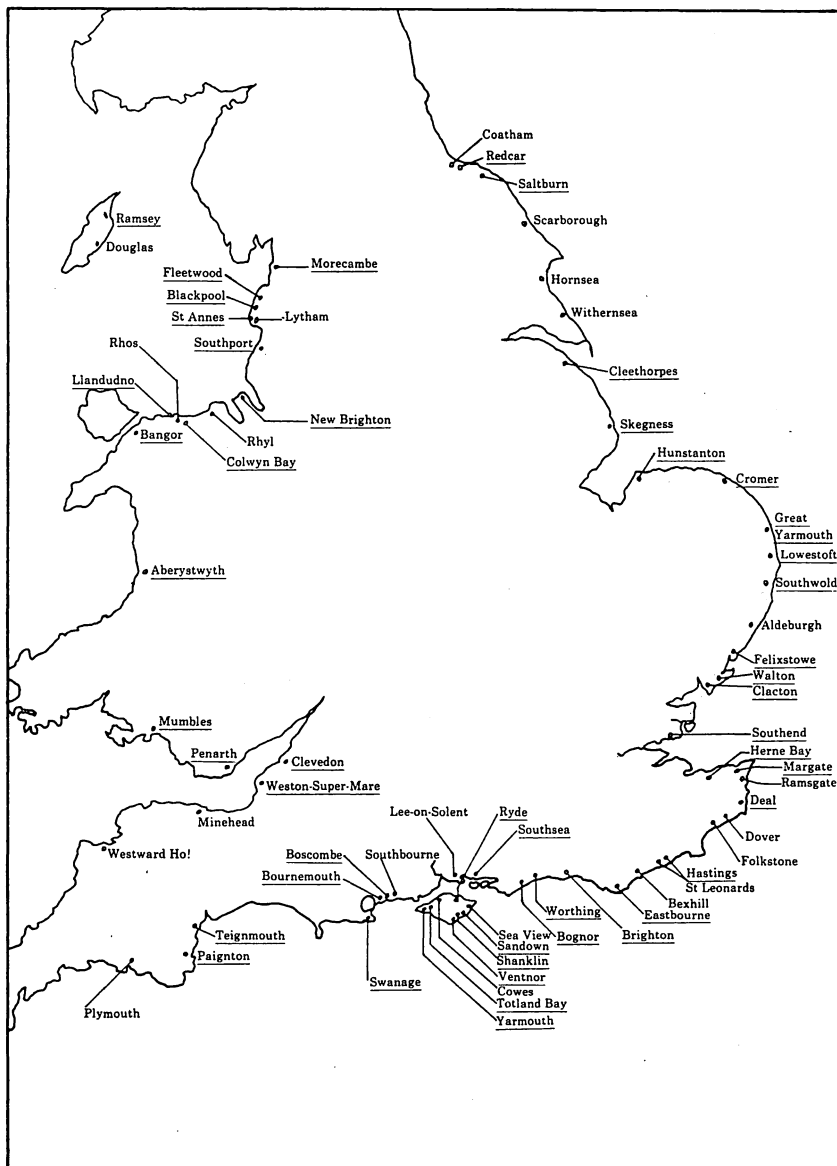


表 6 ピアの建設数（竣工年）

1814—50年代	10
1860年代	19
1870年代	20
1880年代	13
1890年代	15
1900—1910年	11
1957年	1

（出所） Bainbridge, *op. cit.*, Appendix A.

光客の誘致に力を入れはじめた。ピアには突端に浮き浴場や写真撮影室、軽食堂、キオスク、大展示室、読書室、望遠鏡、天気予報板が設けられた。定期的に関われるバンドコンサート（日曜日は宗教音楽）や打ち上げ花火は人気の的であった。ピアは地元住民や内外観光客のプロムナードであって、ファッショナブルな服装で着飾った紳士・淑女、色とりどりのパラソルが行き交い、それ自身がまた観光資源になりえた。プロムナードは今やチェイン・ピアに観光客を呼び込むセールスポイントであった。駅馬車時代の中流階級にとって、入場料2ペンスのピアは安く十分楽しめる遊び場であった（因みにブライトンでは1866年にウェスト・ピア（1,115フィート）が、1901年にはパレス・ピアが新設され、チェイン・ピアは何度か嵐で破損したのち1896年に撤去された³²⁾）。

ピアの年代記によると、ワイト島のライド・ピア（1,250フィート、後年2倍以上に延長）が最も古くて、これが1813年、それ以降、ブリテンでは89のピアが建設されている。これを時代別に分けると表6のようになる。表から分かるようにピアの建設ラッシュは1860年代に始まっている。これはなぜだろうか。余暇市場の増大に応じて臨海リゾートが成長し、各リゾートが観光客の誘致を競えば、趣向をこらしたピアが増加するのは当然の結果といえるかもしれない。しかし、このほかにも幾つかの理由が考えられる³³⁾。

32) Cyril Bainbridge, *Pavilions on the Sea: A History of the Seaside Pleasure Pier*, 1986, pp. 25-32.

33) Walton, *Seaside Resort*, p. 164; Adamson, *op. cit.*, p. 20.

第1に製鉄技術の改善によって鉄材が大量に安価に供給されるようになったことと、スミートン、テルフォード、ブルーネル等による土木技術、機械工学の知的蓄積があったこと、第2に鉄道建設を通じて、橋づくりの豊かな経験をもっていたこと、第3に大資本の調達が可能になったことである。多くのピア会社は当初8,000~20,000ポンド(のちに追加)を調達せねばならなかったが、1855—1862年の間における株式会社制度の法的整備によって、地元または他の都市の投資家から比較的容易に資本が集められたこと。第4にピアを建設し、入場料を徴収することは議会の承認を必要としたが、1861年に制定された「棧橋・港湾一般法」(General Pier and Harbour Act)によって手続が簡素化されたことである。

次にピアの実態を2つの地区—成功例の多い(A)南部のサセックス州(ヘイスティングズ、セイントレナーズ、ベックスヒル、イーストボーン、ブライトン、ワーシング、ボグナー)と、反対に失敗例の多い(B)北部のヨークシャー(コーサム、レドカー、ソールトバーン、スカーバラ、ホーンシー、ウィザーンシー)—をとりあげて紹介してみよう³⁴⁾。

(A)サセックス州のピア

ヘイスティングズ・ピア(1872年開設)は2,000人収容のパヴィリオンをもち、コンサート、ミュージカル、演芸が催され人気を集めた。この成功が近隣のリゾートに刺激を与えた。それまで単なるプロムナードにすぎなかったワーシング・ピアでは1887—9年にパヴィリオンを付設し、ブライトンでは1893年にウェスト・ピアを建設してパヴィリオンを開き、イースボーンでは後述のように、1888年に自治体が民間のパヴィリオンを買収して、経営に力を入れた。ピアの新設ではセントレナーズが1888—91年に30,000ポンドかけてピアの傑作(960フィート)をつくり、入口に近く700人収容のパヴィリオンを設けた。ブライトンでは建設から70年を経て老朽化したチェイン・ピアを改築することにな

34) Adamson, *op. cit.*, pp. 25-30.

り、1889年に資本金15,000ポンドのパレス・ピア会社 (Palace and Pier Co.) が設立され、旧会社の株主には 100 ポンド株に対して現金13ポンド 6 シリング 8 ペンスと新会社の社債36ポンド13シリング 4 ペンスを与えた。政府は旧ピアの撤去を条件にパレス・ピアの新設を許可した。1896年12月の嵐で旧ピアは破損、撤去されたが、1901年には(ウェスト・ピアより600フィート長い) 全長1,760フィートのパレス・ピアが竣工した。1,500人収容のパヴィリオンをもつイギリスでも比類のない堂々たる娯楽センターであった。サセックス州で唯一の失敗はベックスヒルで、1898年に着工、ピアの一部が建っただけで挫折している。

(B)ヨークシャーのピア

サセックス州のピアが高い成功率をおさめたのと対照的にヨークシャーでは不運や失敗が多かった。1865年、ホーンシーではピア会社が設立されたが、着工はずっと遅れて1879年になり、翌年小船に衝突されて、ピアもパヴィリオンも大損失をうけ、結局、計画を断念せざるをえなかった。有名な温泉地であり、臨海リゾートであるスカーバラのピア(1866—9年建設)も1883年に船の衝突で損傷し、ロンドンの事業家に1,240ポンドで身売りされた。彼は10,000ポンドを投じて修理し、バーやパヴィリオンを設けたが、温泉の方に観光客をとられて経営不振になり、1904年に再び身売りされたが、翌年の嵐で流されてしまった。損失の一部は保険金でカバーされたが、ついに再建されなかった。ソールトバーンではソールトバーン振興会社 (Saltburn Improvement Co.) の出資で1868—70年に1,400フィートのピアとパヴィリオンを設置したが、1874、1875年の嵐で破損し、競売に付された。1900年、新しい所有者は1,250フィートのピアを再建するとともに、小劇場、バンド演奏場、食堂等を付設してリゾートの名所に仕上げた。ヨークシャーの北端に並ぶレドカーとコートハムのリゾートではそれぞれのピア会社によって、前者では1871—3年に1,300フィートのピアが、後者では1873—5年に1,800フィートのピアが建設された。レドカー・ピアは1880年、1885年、1897年と、打ち続く船舶の衝突事故に見舞われた上、1898年には火災でピア突端部を失うという不幸が続いたが、20世紀の初めには

修復を了えていた。他方、工事中に衝突事故のあったコートハム・ピアは1875年、2つのパヴィリオンとともに完成したが、1898年の嵐で破壊され、会社は倒産、橋はスクラップになる。最後にウィザーンシー・ピア（1875—8年建設、1,196フィート）であるが、こども短命で、1880年、1882年の嵐でダメージをうけ、一部だけ残ったが1900年に撤去されている。

パヴィリオンも含めてピアの建設と経営は、上述のように株式会社制度（1855—62年の間に成立）を利用した民間資本で営まれるのが普通であったが、高級リゾート、ボーンマスではなぜか市営事業であった³⁵⁾。ピアというリゾートの重要なアメニティに地主も起業家も消極的であったので、地域住民と商人は積極的に市当局に働きかけ、1859—61年にとりあえず1,000フィートの木造棧橋がかけられた。この町の最初の市営事業である。次いで1878—80年に22,833ポンドが投下され、鉄製の本格的なピアが新設された。市はボーンマス 振興委員会（Bournemouth Improvement Commission）の下に設けられたピア委員会（Pier Committee）に一切の運営を任かせた。ピア委員会は旅行業者と提携、祭りやレガッタのようなイベントの演出、バンド演奏、ビーチハットやデッキチェアの貸し出し、断崖にエレベーターの設置など、観光客の誘致に知恵をしぼった。それでも収入は所要経費をわずかに上回る程度で、市債の利払いには市の一般財政からの補助金でまかなわれた。1903年、強気の同市はさらに隣接リゾートに手を延ばし、経営危機に陥っていたボスクーム・ピアを買収している。ピアの集客力とその経済的波及効果が経営の赤字を償って余りあるとの読みである。

過去、百数十年にわたって、地域の住民やそこを訪れた無数の観光客に親しまれてきたピアも、1950年代から、ヨットやモーターボートが並ぶマリナーに席をゆずりつつある。しかし、戦時中の砲火やさまざまな天災人災に耐えて生き残った50余は、今なお内外の観光客を楽しませている。

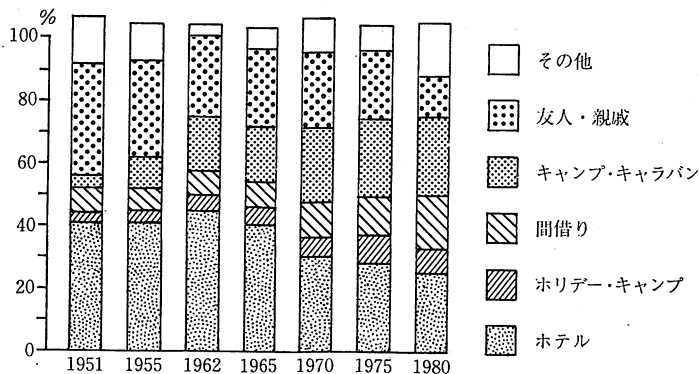
35) Roberts, *op. cit.*, pp. 142-45.

V リゾート関連産業

成熟した臨海リゾートには、豪華なシーサイドホテルから、主婦が副業に営む素人下宿、民宿にいたる、様々のグレードの宿泊産業をはじめ、音楽・演芸その他の娯楽産業、ゴルフ・テニス・貸自転車・乗馬などのスポーツ産業、土産品店、レストラン、喫茶店といった飲食店、遊覧船その他の交通業、それに洗濯業など、多種多様の関連産業が集まっていた。ここには、その中の3つの重要産業—宿泊産業、娯楽産業およびスポーツ産業（ゴルフ）—をとりあげてみたい。

（1）宿泊産業

19世紀後期になり、リゾートを訪れる観光客が増加するにつれて宿泊産業はリゾート都市の最も重要なビジネスになる。しかし、リゾート盛期の宿泊産業の全体像—たとえば軒数、客室数、従業員数など—は、実のところよく分かっていない。零細自営業、主婦の内職的経営が夥しいからであろう。主要な形態としては、貸別荘、貸部屋（アパートメント）、ボーディングハウス（またはロジン



（出所）Patmore, *op. cit.*, p. 45.

（備考）一部の観光客は複数の宿泊施設を利用するので、合計は100%を超えている。

ゲハウス)およびホテルの4つがある³⁶⁾。

貸別荘は富裕な人びとが一軒丸ごと借り、自分の召使を連れていってリゾートライフをおくるケースで、長期契約が多い。貸部屋(アパートメント)は1シーズン1部屋か2部屋を借り、店やマーケットで食料品を買ってきて、調理その他は経営者の主婦(ランドレイディ)かその召使に依頼する方式である。安上がりで、低所得層にうけたが、しだいに賄いつきのボーディングハウスに移っていった。しかし、イングランド北部の労働者のリゾートでは1930年頃までこの方式が残っていたという。ボーディングハウス(賄付下宿屋)、ロジングハウス(素人下宿または民宿)にはさまざまなものが含まれる。19世紀後期、ボーディングハウスのトップクラスは、サービスの内容からいって、ホテルとほとんど変わらない。ふつうフルボード、つまり3食ともランドレイディの世話になる形式であったが、後には昼食ぬき、さらに夕食ぬきのものも現われる。朝食のみになれば今日の「ベッド・アンド・ブレックファスト」(B. & B.)と同一になる。豊かな中流階級がリゾートライフを楽しむさい利用したのが、このボーディングハウスで、経営者、ハウスキーパーは中年の主婦一寡婦、離婚者、未婚者一が大多数で〔表7〕、彼女らはしばしば「ランドレイディ」の名で親しまれた。

表7 下宿屋・飲食店の経営者—リゾート別男女比(1911年)

	男 子	%	女 子	%
ブラックプール	717	17.2	3,457	82.8
ボ ー ン マ ス	264	16.9	1,300	83.1
ブ ラ イ ト ン	338	18.5	1,487	81.5
イーストボーン	132	13.7	833	86.3
グレートヤーマス	77	10.9	632	89.1
ヘイスティングズ	148	14.4	879	85.6
サウスエンド	116	12.3	829	87.7
サウスポート	121	10.6	1,106	89.4

(出所) Walton, *Seaside Resort*, p. 91.

36) Walton, *Seaside Resort*, p. 82.

ちなみに、現代のイギリス人が休暇中に利用する宿泊施設は前ページ図のようである。

1890年代にはイングランド南部のボーンマス、ブライトン、ヘイスティングズにはこうしたボーディングハウスが無数に存在していたが、大衆リゾートのブラックプール(ランカシャー)では1901年になっても13軒しかなかったという³⁷⁾。

次にホテルであるが、19世紀後期、富裕層の利用がふえた。建物は当初からホテルとして建てられたものと、宏壮な邸宅を改造したものがあった。中には投機的な個人やパートナーシップ、鉄道会社の兼営もあったが、多くのホテルは数万ポンドの資本をもつ株式会社組織で営まれた。リゾート・ホテルが急増するのはレジャー棧橋の建設と同様、中流階級の観光ブームがピークを迎える1860年代であった。たとえば1864年にはブライトンに16万ポンドの工費を投じたグランド・ホテルが完成している。このホテルは貴族や上流階級の人びとにも利用されたので、貴族趣味の成り上がりにはとりわけ歓迎されたという。ボーンマスやイーストボーンにも宮殿のような豪華なホテルが相次いで建設された。ボーンマスのボーン・ホテルは客室125で、図書室、ダンスホール、劇場、玉突場、浴室10が設けられていた。またモントドア・ホテルは湯治浴場、ダンスホール、ウインターガーデン(熱帯植物を植えたガラス張りの遊歩庭園)、それに全天候型テニスコートまでついていた。イーストボーンのホテルはけばけばしさが無く、中流階級の人びとに広く利用されていたという³⁸⁾。

(2) 娯楽産業

ヴィクトリア朝の人びとが臨海リゾートに見出した楽しみは、訪れるリゾートによってまちまちであった。小じんまりしたリゾートでは散策、スケッチ、ボート、ピクニック、磯遊び、海水浴が主なもので、町にはふつう読書室、貸本屋、気のきいた店、コンサート・ホールがあり、元気な人びとはアーチェリー、乗馬、競技場、クロッカー、そして世紀末にはローンテニスも楽しめた。ところが群衆が押し寄せる大きなリゾートになると、平素は静かで控えめなヴィクトリアンも、音楽・ショーなど浜辺の賑いですっかり陽気になったよう

37) Walton, *The Blackpool Landlady: A Social History*, 1978, p. 4.

38) Walton, *Seaside Resort*, p. 92.

である。「街頭音楽隊が海岸通りや大きなホテルの前で演奏しており、裏通りには流しのバイオリン弾き、コルネット吹き、バグパイパー、手回し風琴が見られた。浜辺もプロムナードも終日人で埋まり、おしゃべりや笑い声に混じって犬の吠える声、子供の叫び声、鰻・貽貝・小えび・花・砂糖菓子売る女の呼び声が聞こえた。旅芸人やサーカスも海辺の町に来ており、太鼓やトランペットで賑やかな宣伝を繰り返している。熊踊りや猿の芸は子供を喜ばせ、浜辺では操り人形芝居や「ニガー・ minstrel」ショーが老若の見物客を集めている」³⁹⁾—こんな光景の中に見られる娯楽は、労働集約的な伝統的ビジネスにすぎない。しかし世紀末期の臨海リゾート全盛期のように、それらが路傍や小屋掛からピアのパヴィリオンに移り、大資本が投下された娯楽会社の支配下に入れば、それは近代的な娯楽産業の一部になる。

リゾート・ビジネスの特徴は、需要が特定の曜日(週末)や季節(夏)に集中し易いことである。季節の極端な繁閑差を無くするためには、冬季に客寄せをはかることである。その対策として考え出されたのが水族館とウインター・ガーデン(冬園)で、ともにリゾートにおける大衆娯楽のパイオニアとなり、1870年代に流行した。どちらの場合もコンサートホール、寄席、ダンスホール、スケートリンクなどが併設された。資本金は数万ポンドが多い。1872年にオープンしたブライトンの水族館、ウインターガーデンは、1871年のブラックプールにおけるレイクスホール社(前述)の遊園地経営に刺激されたものである。しかしブームは1879年に崩れ、ニューブライトンの Aquarium, Bath and Hotel Co. の倒産をはじめ、各地の会社が倒産し、企業家も株主も、この種の事業が景気や流行、その年の天候に左右され易い「水商売」であることを改めて痛感

39) Marjorie & C. H. B. Quennell, *op. cit.*, pp. 209-210.

「ニガー・ minstrel」(nigger minstrels)——顔に墨をぬって黒人に扮した芸人一座が、流行歌、踊り、ジョークで楽しませる演芸ショー。アメリカから入り、1858年、ロンドンに登場、間もなく海辺で人気のアトラクションになる。20世紀に入るとピエロ芸人に人気を奪われるが、Black & White Minstrel Show は今も劇場やテレビに登場する。

させられた。2度目のブームは1890年代に訪れたが、かなりの配当を続けた会社は少なかったようである。大手娯楽会社の創業資本は地元の商店主、建築業者、醸造業者、弁護士、医師が多く、他の地域からの出資者は、ピア会社の場合と同じように、南部のリゾートではロンドン、北部ではランカシャー、ヨークシャーの工業都市に多い⁴⁰⁾。

（3）ゴルフ・ブーム

ヴィクトリア期の中流階級にとって、リゾートライフのもう一つの楽しみはスポーツであった。リゾートではボート、ヨット、水泳、魚釣、乗馬、クロッケー⁴¹⁾、スケート、バドミントン、アーチェリー、クリケット、狩猟、とりわけローンテニスとゴルフおよびサイクリング⁴²⁾が大流行した。ローンテニスは1870年代に中流階級の男女の間に急速に広まった。既存の全英クロッケー・クラブが、1877年に全英クロッケー・ローンテニス・クラブ (All-England Croquet and Lawn Tennis Club) になり、同年、ウインブルドンで第1回ローンテニス選手権大会が開かれている。他方、ゴルフは1885年に第1回全英アマチュアゴルフ選手権大会、そして1893年には第1回全英女子アマチュアゴルフ選手権大会が開かれて隆盛期を迎えている。この時期のゴルフの流行はリゾート産業の視点からも興味深いものがある。

イングランドでは1880—1914年がゴルフ・ブームの時代で、1890年代には、ゴルフはテニスとともに中流階級の海辺の休日には欠かせない楽しみになっており、世紀が替わる頃には、どの臨海リゾートも手近かにゴルフコースをもっていた。これをクラブの増加でみると、1850年にはただ1つ、1880年に急

40) Walton, *Seaside Resort*, Ch. 7.

41) クロッケー、フランス生まれのスポーツで、1852年、イギリスに入ってくる。芝生の上で行われる軽スポーツで女性に親しまれた。1870年に全英クロッケー・クラブ (All-England Croquet Club) が生まれた。今日、日本で流行しているゲートボールはこれを簡略化したものである。

42) 1880年代、90年代のサイクリング・ブームについては、荒井政治「サイクリング・ブームと自転車工業の興隆—19世紀末イギリス—」関西大学『経済論集』37巻5号、1988年参照。

増して12, 1887年には50, そして1914年には1,200を超え, コースを利用する男女ゴルファーは20万を超えていた⁴³⁾。たとえば, リゾートの多いサセックス州でも, 1891年にはクラブは3つ(イーストボーン, フォレストロー, リトルハンプトン)にすぎなかったが, 1915年には36を数えた。またフェリックスストウ(サフォーク州), ホイレイク(マージーサイド), ライサム・セイント・アンズ(ランカシャー)それにウェストワードホー(デヴォンシャー)のようにゴルフ場で知られた小リゾートもあった。

ゴルフ場経営は土地多消費型産業であり, イニシャルコストの大きい産業である。中流階級をひきつけ高級リゾートのステイタスを維持するには, ゴルフ場の設置が不可欠(高級リゾート, イーストボーンの土地区劃図(18ページ)を参照)という時勢になり, 他方, 広大な土地の獲得と整地, クラブハウスの建設, ランニングコスト等に要する多額の資金も, 会社組織で比較的容易に調達でき, 出資した地主やホテル業者も十分報われるとなれば, 臨海リゾート周辺の地価高騰は必至である。初期のコースは大てい9ホールであったが, しだいに18ホールに拡大した。フルコースでは平均100エーカー(約12万2,000坪), つまり小農場規模の土地がいる。農業不況下の地主は農民に貸していた農場や牧場の安い地代を一挙に引き上げようとするから, 借地期限がきた土地は結局, 建築業者やデベロッパーの手に渡っていく。こうしてゴルフ・ブームの間に総面積ではワイト島に匹敵する1,000以上の農場がゴルフコースに姿を変えていった。

次は整地・建築である。イングランドの最初のコースは農場の姿がそのままコースに使われた。農場の溝や生垣は「自然のバザード(障害地域)」であり, 農場の納屋や小屋はゴルファーの衣服や持物の保管庫に使われたが, これらも後に整理され, バー, レストラン, 婦人専用室のある立派なクラブハウスが数千ポンドを投じて新築された。ノーフォークジャケットやニッカーボッカーを着用し, コースに出てクラブを振れば, 失った農村生活の楽しみが甦ってこよ

43) John Lowerson, 'Scottish Croquet', *The English Golf Boom, 1880—1914*, *History Today*, May 1983.

う。しかし原っぱで友人たちと球を打つ単純な遊びではあっても、広い土地を小人数の会員で専用する贅沢のコストは、決して安くなかったはずである（一例、人会金は1ホール200ポンド）。

広い農地から農民の姿が消え、代って初心者にゴルフの基本を指導するプロゴルファーとキャディが現われた。プロゴルファーはクラブ専属またはパートタイマーで、スコットランド出身の若者が多い。資格をもったプロゴルファーは校長よりやや低い程度の給料が支給されていたという。1,000人余のプロの下には、それを上回る数のキャディが雇用された。家計を補う少年たちは賭つきで週6シリングとチップが収入で、夜間の学校へ通っていた。ゴルフ・ブームはクラブやゴルフ・ボールの生産を家内工業から工場生産に変えた。1914年、イギリス(UK)ではダンロップ社その他のメーカーが200万ポンドのボール市場を分けあっていた。この市場規模は消費ブームをよんでいたバナナのそれに匹敵する。ゴルフ・ボールの生産は今や日刊新聞やゴルフ専門誌で宣伝され、量産される一つの産業に成長していたのである。

ゴルフは年令にも性別にもこだわらない数少ないスポーツの一つで、女性ゴルファーも1893年、女子ゴルフ連盟(Ladies Golf Union)を結成し、同年、第1回女子アマチュア・ゴルフ選手権大会を開いている。しかし、当時のゴルフはあくまでも恵まれた中流階級のスポーツであって、労働者階級を寄せつけない。たとえば年平均18ポンド(1911年)というゴルフの費用は、中流階級のレジャー支出としてはリーズナブルであっても、労働者にとっては一家の年収の1/3に相当したのである。労働組合のリーダー、ベン・ティレット(1860—1943年)は1927年、労働者階級のために公設コースの設置を主張した。1936年、イングランドには約50の公設コースがあったが、そのほとんどは第1次大戦後に設けられたものである⁴⁴⁾。

44) S. G. Jones, *Workers at Play*, 1986, pp. 95-97.